

ついに始まった福島原発事故刑事裁判

海渡 雄一 (福島原発告訴団弁護団)

東電幹部の刑事責任を明らかに



実施するはずだった「津波対策」

6月30日、勝俣、武黒、武藤三被告人の刑事責任を問う、福島原発事故刑事裁判の第1回公判がようやく開かれ、検察官役の弁護士による冒頭陳述と証拠の要旨が告知されました。

被告人とその弁護人等は「事故の予見可能性がない」などとして無罪を主張。しかし、示された証拠を見る限り、被告人らの主張は通らないことではな

らな。東京電力の津波対策を担当していた土木調査グループは、2007年末に、政府の地震調査研究推進本部(以下、地震本部)の長期評価に基づいて津波評価を行ない、2009年6月に予定されていた耐震バックチェックの最終報告までに、この津波に対応する工事を実施する方針を決めました。これは政府見解であり、土木学会のアンケートでも支持する見解が多く、東電の東通原発の許可申請でも取り入れていたことなどが、この見解の根拠です。この事実、裁判での大きな争点となるでしょう。

2008年1月11日、東京電力の土木調査グループは、吉田昌郎らの承認を得た上で、東京電力として東電設計に対し、長期評価の見解に基づく日本海溝寄りプレート間地震津波の解析等を含む「津波評価業務」を委託しました。これは正規の委託契約であり、この方針は、2月16日に被告人ら3名も出席した「中越沖地震対応打合せ」の場で確認されていました。

耐震バックチェック担当だった酒井俊朗が、2月4日に東電の長澤和幸らに送信した「1F、2F津波対策」と題するメールが残されています。そこには「現在土木で計算実施中であるが、従前評価値を上回ることは明らか」「津波がNGとなると、プラントを停止させないロジックが必要」などとあります。

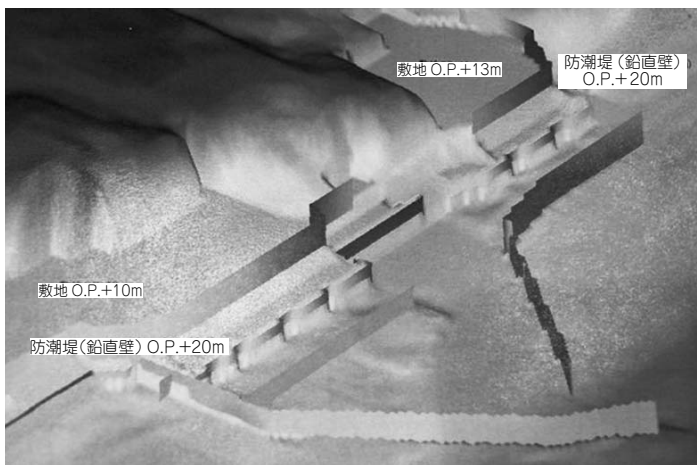
まさに原発を止めなければならぬほど重大な事態であることを、技術陣は認識していたということです。これは「試算」ではなく、東電が耐震バックチェックのために行なう津波対策の内容を定めるための基礎資料でした。

南北から建屋を覆う計画

2008年3月18日、東電設計と東京電力との打ち合わせが行なわれ、東電設計から計算結果の成果物が納入されています(最大で浸水高15・7メートルの可能性があること)。

その後3月31日、東京電力は、経産省原子力安全・保安院に対し「福島原発5号機に関する耐震バックチェック中間報告」を提出。同時に福島県とマスコミにも発表しました。この中間

報告では、津波に対する安全性には触れられていませんでしたが、被告人武藤は、福島県とマスコミに対し「2009年6月までに津波対策を完了させ、バックチェックを終了する」ことを明言。これが、この時点での東電の方針であったことがわかります。これを受け、東電設計は4月18日、東京電力に対し「南側側面から東側全面を囲うように10メートルの防潮堤(鉛直壁)を設置すべきこと、5号機及び6号機の原子炉・タービン建屋の東側全面から北側側面を囲うように防潮堤(鉛直壁)を設置すべき」とする検討結果を報告しました。左に示した図は、その立体図面です。



▲法廷でも示された津波対策が計画されていた証拠、鉛直壁の立体図面
※ O.P. (小名浜港工事基準面。干潮の海面水位) + 海拔高さ

*原子力施設の耐震性を再評価する作業

これまで検察は不起訴理由として、そして被告人らは無罪を主張する根拠として「この計算結果では、津波は南側から敷地を襲うこととなっている。南側だけに防潮堤を築く計画となったはずで、それを実施したとしても、東側から押し寄せた津波には効果がなかったはずだ」と主張していました。しかし、東京電力の技術者は、敷地の南北に建屋を覆うように防潮堤を計画していたのであり、検察と被告人らの弁解が成り立たないことが明白となりました。

費用を惜しんで津波対策止める

2008年6月10日、被告人武藤に対し、土木技術グループの担当者らが、地震本部の長期評価を取り上げるべき理由と対策工事に関する検討内容を説明しましたが、武藤は結論を示しませんでした。7月31日、武藤は津波対策を先送りしたのでした。

実はその10日前、7月21日には武藤、被告人武黒らが出席して「中越沖地震対応打合せ」が行なわれました。中越沖地震で柏崎刈羽原発が停止

空間線量を測ってみませんか？

■貸し出しについて

お近くの会員を通して、電話またはファクスでお申し込みください(難しい場合はご相談ください)。貸し出しは、1カ月を上限とさせていただきます。送料はご負担ください。万が一破損、紛失をされた場合は弁償いただく場合もございます。不明な点は「女のしんぶん」までお問い合わせください。

機種は2種類あります▶▶



エステー エアカウンター S
操作が簡単なので気軽に空間線量を測れます。地上から1メートルの位置でγ線を測るための測定器で、地面や砂場の表面等を測定するのには向いていません。



ECOTEST TERRA MKS-05
γ線、β線が測れ、様々な位置から測定が可能です。測定モードが多いため、操作に慣れるのに時間がかかるかもしれません。

し、巨費を投じて耐震補強工事をしなければならず、東電の経営を圧迫していたことについて報告されました。これが、武藤らによる「ちゃぶ台返し」の伏線だといえます。

そして7月31日、武藤の指示で「地震本部の長期評価に基づいて津波対策を講じるべき」とする土木調査グループの意見は採用されないこととなりました。これは、それまで土木調査グループが取り組んできた10メートルの高さの敷地)を超える津波の襲来に備えた対策の停止を意味していました。このことこそが、福島原発事故の決定的な原因です。

東京電力では、都度必要性を判断し、非常用海水ポンプ電動機をかき上げする等工事を行なってきました。しかし、長期評価に基づいて10メートルを超える津波が襲来するという計算結果が出ると、うって変わって、土木学会に検討を委ね、津波対策を先送りしたまま、漫然と運転を継続したのでした。秋からは、証人調べが始まります。福島原発事故刑事裁判支援団へのご支援をお願いします。